



Title	アリストテレスの目的論的自然観 II
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大學文學部紀要, 42(3), 115-131
Issue Date	1994-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33629
Type	bulletin (article)
File Information	42(2)_PL115-131.pdf



[Instructions for use](#)

アリストテレスの目的論的自然観II

千葉 恵

5

ここで「自然学」ii 9 を新たに読み直すことにより、アリストテレスが生物学的著作で主張する同一事象の目的因と必然性による説明の共存性、両立性の根拠を探る。これは彼の目的論的自然観を解明する上で重要な視点を提供するのであろう。彼は ii 9 において目的因がとりわけ自然であるとする ii 8 の論述を受け、必然性が自然物においてどのようにあるかを考察する。(cf. 198 b 11) ⁽²⁰⁾ というのも自然学者達は目的ではなく必然性こそが優れて自然であり生成の原因であると主張しており、必然性が彼自身の目的論的システムの中でどのように位置づけられるべきかは不可避の課題だからである。尚 ii 9 と類似の主題を論じる「動物部分論」i 1 で彼は必然性を「必然であるが故に、多くの物が生じるから」(642 a 3) という理由で、目的因と並ぶ一原因とみなす。ただし必然性は多くの意味で語られるのに、「必然的に」を主張する人々はどの意味での必然性を語っているのか(642 a 5) 不明であると彼らを批判する。⁽²¹⁾

秩序正しく恒常的な自然の伝統的研究の継承と批判の文脈において、アリストテレスは目的論的自然観を形成する。その理解の鍵となる必然性の問題をめぐって、彼は ii 9 冒頭で「果して“必然的に”[と言われる必然性]は条件的に [HN] あるのか、それとも [それ [HN] のみならず] 端的に [SN] もあるのか」(199 b 34) と必然性の自然物の生成における存在様式を二者択一的に問う。⁽²²⁾ 彼は壁の生成の例により自然学者以来の SN の様式を提示す

る。木は軽量故に上方に石は重量故に下方に向かう自然本性により、壁は必然的に生じる。端的必然性とは生成のゴール自身の四元素に基づく構成要素の持つ「転化の生来の衝動」(192 b 18) とも言うべき自然本性とその運動故に、ゴールが必然的に生成することを言う。

端的必然性 (SN) = 四元素の力である熱冷等は自然本性上これこれであるので、あれらが必然的に存在しかつ生成する。(198 b 12, cf. 646 a 15, 1015 b 10)

= これらは自然本性上このようにあるので、かのものは存在する。
(642 a 35)

他方条件的必然性 (HN) は一般的には「その必然性の根拠が他にあるもの」(1015 b 9) のことであるが、我々の文脈においては生成の終局に実現される目的がその生成の始点を構成するものとそのプロセスの必然性を決定する。

条件的必然性 (HN) = もし家や何か他のゴール (τέλος) が存在するであろうなら、これこれの質料が存在すること必然である。最初にこれが生じかつ運動せねばならず (δεῖ), 次にこれがと、ゴール即ち目的に至るまでこの流儀で次々に各々が存在、生成する。(639 b 27, cf. 642 a 33, 200 a 12) ⁽²³⁾

従来 ii9 は SN を否定し HN のみを生成上の必然性の様式として展開すると広く解され SN の機能が見過ごされてきた。⁽²⁴⁾ アリストテレスが壁という目的的事であることが自明な例で SN を説明するのも、目的的事のものにも SN の様式が見られるが故にである。しかしその連累は(1)対偶表現と(2)「～故に」として以外では～故にではない」という限定付の因果関係を伴い単純ではない。

(A) 壁はこれら(土や木)なしには生じなかったが、質料故にとして(ὡς δι' ἕλην) 以外では、これらの故にではなく、何かを保存隠匿するために生じたのである。(200 a 5)

(1)(2)の限定表現はこの事例をもとに目的的事生成物全体に一般化される。

(B) 何かのために存在する物においては、ある必然的な自然本性 (ἀναγκαίαν τὴν φύσιν) を持つものどもなしにはないが、質料を持つ

ものとして (ὡς ἐλθν [ἐχον]) 以外にはそれらの故にではなく、何かのためにである。(200 a 8)

「必然的な自然本性」を持つものなしにはゴールはないという(1)対偶表現はゴールを前提とする HN の一表現でもありまた SN の一表現でもある。HN の存在様式をめぐる困難な問いはいかにして未来に生じるゴールがそれ以前に生じるその構成要素の必然性を決定しうるかをめぐるが、この対偶表現は時間的に先行する物が生じることなしには、それにより形成される後行する物は生じえないという自明な事柄を表し、この問題に触れずにゴールを前提にする必然性の存在様式を確定しうる。他方「必然的な自然本性」は四元素の自然本性に基づく必然性のことであり、どんな生成物も質料的に特定するならば四元素の合成以上のものではない以上、これはゴールの生成のある原理として機能しうるものであり、この原理なしにはゴールは存在しない。しかしこの原理がゴールの存在をもたらす力があるのか、あるとすればいかにしてかが、SN の自然の生成における存在論的身分、存在様式の問いなのである。

アリストテレスは(2)の限定的因果連関によってこの問いに答える。彼は「必然的な自然本性を持つもの」に「質料故にとして」という限定を賦す。この限定は合成体の形相や目的因に言及することなく、それを純粋に質料的に特定する限り、ゴールに対して「質料としての」原因を提供しうることを表している。そしてこの(2)限定的な「故に」連関によって、私はこれこれの質料 (M1~Mn) があれば、常にこのゴール (Gn) が存在するという必然性関係が成立するという意味で、質料がゴールの存在の十分条件を特徴付けると解する。このことは HN との比較によって明らかにされている。二つの必然性の存在様式は、彼が HN の例として鋸の目的、機能である切断を実現するためには、それが硬いもので出来ていなければならないとした後に、次のように描かれる。

その時必然性は条件的であるが、その必然性はゴールが必然であるのと同様な仕方 (οὐχ ὡς τέλος) であるのではない。何故なら [後者の理由としてゴールとしての必然性があるのは] 必然性は質料に存するから

であり、[前者の理由として必然性が条件的であるのは] ためのそれはロゴスに存するからである。(200 a 13) ⁽²⁵⁾

ゴールを必然化するのそれが純粹に質料的に特定される限りにおいて、つまりロゴスのレベルに属する目的因への言及なしに單純物体の本性とその運動に始まる「質料として」特定される SN の力に訴える限りにおいてである。ロゴスのレベルにある目的はこれこれの質料の必然性の根拠ではあるが、それが具体的に実現されるのは質料を伴ってのみであり、その実現されるゴールの質料的側面は純粹に質料的な記述により必然的なものとして描かれる。SN は決してロゴスなる目的を作ることは出来ず、目的を実現するゴールの質料を実現する。M 1~Mn-1 は Mn を必然化し、Mn は Gn (=Mn+Fn) の「質料として」Gn の存在を必然化する。というのもゴール Gn はその形相 Fn がロゴスによってのみ把握される「シモン (くぼみ鼻)」に比せられる質料・形相不可離な存在だからである。シモンの本質を探求する方法とは質料の構造、機能そして様態を分析し、各々が何であり何のためにあるかのロゴスの認識に至ることである。(194 a 12 ff, b 9-13, 198 a 22, 403 b 11, 1025 b 34-26 a 6) つまり自然物の本質としての形相・目的因は「ロゴス上のもの」であり、そのロゴスによって我々は肉が何であり、骨が何であるかを定義するのであり、それはアイデアのような離存性を持たず「ただロゴス上においてのみ質料から離存的なもの」である。(193 b 1-5, cf. 194 a 12-14, 1036 a 32-34, b 3-7) その質料のあるところ、そこにそのゴールが存在するという意味で十分条件としての必然性関係が(2)「質料故に」という限定によって成立する。これが限定的な原因としての「必然的な自然本性」と呼ばれる質料の持つ力である。

6

アリストテレスは続いてこれら二つの必然性の存在様式を数学の推論との対比において確認している。彼は (a) 「自然に基づいて *κατὰ φύσιν* 生成する物」(200 a 15) と (b) 「何かのために生成する物」(a 19) の双方を幾何学

の一証明 (a 17) と比較する。⁽²⁶⁾

(c)直線はしかじかであるので、三角形は必然的に二直角の内角和を持つ。(a)は外延において(b)を含みかつ広いが、両者は各々に含まれる必然性の様式において異なっている。(a)における必然性は「基体 *ὑποκείμενον*」の本性により、他方(b)の必然性はゴール・目的により決定される。(a)の「自然に基づく」という術語は「衝動 *ὁρμή*」(95 a 1)と同義で「強制 *βία*」と「反対」(276 a 26)とされるが、火の上昇のような単純物体の本性に基づく事柄を言う。彼は「自然学」ii 1で「自然に基づく」生成物を特定する際(193 a 2)、「基体」(192 b 34)と呼ばれる質料的自然という視点から(1)「実体」と(2)「実体に自体的に内在するもの」(cf. 73 a 34-37)である単純物体の本質的特性とされる火の必然的な上昇をその成員としている。(192 b 35)一方形相的自然と基体との結合体である(1)実体は「自然を持つ」(192 b 33)とされ、他方(2)は実体の基礎にありながらも、実体の持つ類いの形相性を持たないために「自然を持たない」(193 a 1)のものであり、(1)と対比されている。(2)は元素の「転化の生来の衝動」(192 b 18)に基づく非目的的な自然現象であると解されよう。(1)(2)ともに「自然に基づく」と呼ばれるのはこのような性質を持つ質料的基体というボトムアップの視点から生成を捕らえているからである。(193 a 29)このように(a)における必然性は基体に基づくボトムアップの様式で決まる。(c)においては、結論の前提ないし構成要素が結論の必然性を決定するのであり、これは「ある意味で」つまり幾何学における無時間性という違いを除けば、(a)と「平行」(200 a 16)関係にある。他方(b)の必然性の様式とは「逆」(a 19)の関係にある。生成の終局において実現されるゴールがその終局より明白に時間的に先行するその先行条件ないし構成要素の必然性をいわばトップダウンの様式で決定するからである。このように、生成における(a)のSNのケースと(b)のHNのケース二つの必然性の様式は数学の一証明を介して間接的に対比されている。目的的な生成物は両方の必然性関係を持つが、どちらの場合においても必然性の座は質料である。自然学者は目的的で恒常的な生成物の質料に存在するこの二つの必然性の様式を判別しそこねたのであった。

アリストテレスはこれまでの議論を次のように纏める。

従って明らかに自然物における必然性は質料として語られるところのもの ($\tau\acute{o} \acute{\omega}\varsigma \acute{\upsilon}\lambda\eta \lambda\epsilon\gamma\acute{o}\mu\epsilon\nu\omicron\nu$) でありまたその運動である。また自然学者は双方の原因を述べねばならないが、何かのためにのほうが一層原因である。何故ならそれは質料の原因であるが、質料はゴールの原因ではないからである。つまりゴールは目的でありまた定義とロゴスからの原理なのである。(200 a 30)

このように先行自然学者によって主な原因とされてきた必然性は彼のシステムにおいてはゴールが「質料として」限定される限りにおける限定的な原因に留まる。質料としてのゴールが必然化され、質料はゴールの存在に対して十分条件を特徴づけえるが、ロゴスでもあるゴールを生み出すその原因たりえず、逆に HN の存在様式において見たように、目的が質料の原因なのである。ただし両原因は各々自然であり、自然学者は先述のように質料の分析を通して目的を知るのでもあるから、「一方、質料としての自然 $\tau\eta\varsigma \mu\acute{\epsilon}\nu \acute{\omega}\varsigma \acute{\upsilon}\lambda\eta\varsigma$, 他方、実体としての自然 $\tau\eta\varsigma \delta' \acute{\omega}\varsigma \omicron\upsilon\sigma\acute{\iota}\alpha\varsigma$ 」(641 a 27, cf. 195 a 3-8) の双方の認識に向かう。(194 a 12-26, 642 a 2 ff) 質料が一方で形相との相関概念であることは疑い得ないが (191 a 8, 194 b 9), 他方「 $\acute{\omega}\varsigma$ として」という限定が与えられる時は、質料は形相や目的への言及抜きに純粹に質料それ自身として特定される。

7

アリストテレスは生成の場所とは地平を異にするロゴスのレベルを導入することにより、先述の未来に生じる物がいかにして、それ以前に生じそれを構成する質料の必然性を決定するかの問いに答える。そこでは必然性を決定するものは、もはや前件が接続詞「もし」に主語ゴールと be 動詞未来形から構成されることによって (200 a 12, a 20, a 24), 時間上先行する後件の否定が後行するゴールの存在を否定する(1)対偶表現に頼ることによっても表現されることはなく、接続詞「 $\acute{\epsilon}\nu\epsilon\iota\sim$ ので」を伴う定義的な前件で表現される。

(C) 家はこの様なものであるので、これらが必然的に生じかつ存在せねばならない。(200 b 1)

(C) の前件は家の設計概念としての定義であり、それが生成のレベルにおける質料の存在と生成の必然性を決定する。「ねばならない $\delta\epsilon\iota$ 」(200 b 1, b 2) は後件の「必然的に」における必然性に対するロゴスがもたらす別の次元からのつまり前件からの拘束である。

「自然学」ii 8における目的論の弁証のひとつは先述した自然・技術平行テーゼである。(199 a 8 ff) 技術による製作をなす主体と自然の関係は、製作におけるように自然本性においてあり、自然本性におけるように製作にある、そのような一方に説明的優先権を与えることなしに、双方が他方に対して説明的である、円環的とも言える類似性を示している。そこでは技術と自然のプロセスが同様であり秩序正しいものであることが強調される。技術は思案する製作者から独立した「質料を離れた作品のロゴス(設計概念)」(640 a 32, cf. 740 b 28, 1140 a 9)という普遍的存在であり、製作物の原因である。(194 a 36 ff) 自然物のロゴスの機能はこのように規定される技術に平行的なものとして確定される。(200 a 35) 製作物において「建築家が建築するのは建築術によってである」(195 b 23) ように、自然においても技術に比せられる目的が自然物の定義的設計概念としてロゴスに内在することによって、質料の必然性および質料として特定される限りでのゴールの必然性を基礎づける。

(D) もし人間がこれであるならば、これらが(必然的に生じかつ存在せねばならない)。(200 b 3)

このように平行テーゼからして、(D) 自然物も同じ構造を持つことが主張される。ただし人間の構造の複雑さからして、定義的設計概念を表現する前件の接続詞は注意深く「もし」が使用されている。

ロゴスの生成レベルに対する支配はさしあたりこう記されるが、アリストテレスは「しかし恐らくロゴスにも必然性は存在する」(200 b 4)と続け、「ある部分はロゴスの質料としてロゴスにも存在する」(200 b 7)と結論づけ ii 9を閉じる。つまり後件がロゴスのレベルのことであり、「ロゴスの質料」の必然性がまず設計の段階において決定され、それが生成のレベルでそれに対

応する質料が必然的なものとされ、それ自身の構成要素に内在する「必然的な自然」がそれ自身の力でそしてそれは同時に設計上のプロセスにその質料として対応する仕方では必然的なゴールを形成する。その意味では HN の第一の座はロゴスであると言えよう。質料がこれこれの仕方ではアレンジされているのは、その組織化原理といえる目的因によるものであり、ロゴスのレベルでいかなる物が質料となりいかなる運動がなされねばならないかがまず決定される。この説明が、前件が後件の必然性を決定する様式の説明記述であり、目的による説明である。他方生成のレベルでその生成の始点から終点であるゴールの生成に至るまで、それを純粋に質料として見る時、それは単純物体の自然本性とその運動に基づく構成要素の運動として前件が後件を必然的に生みだす。そのプロセスの記述が必然性による説明である。

しかしこれは同一事態の「二重の説明」⁽²⁷⁾ というものでは有り得ない。必然性による説明は「常にこの様に生じる」(742 b 19) とあくまでゴールの質料的側面を述べるに留まり、「何故そうなのか」(b 18) その本質を述べることは出来ないからである。本質はロゴスのものである。だからこそ自然学者は目的と質料の両原因を語ることが求められるのである。(200 a 32, 642 a 14) 目的と必然性双方による説明とは例えば「質料 (eg. 眼球, 視神経 etc.) がそれ自身これこれの構造をしている有機体の部分 (目) を形成するのはその本質である目的 (見ること) の故にである」というものであろう。⁽²⁸⁾ 秩序正しい目的的な生成の説明はこのように目的と質料に言及することになるが、それはそのまま自然に見いだされる条件的と端的な必然性を開示することでもある。

8

以上が ii 9 冒頭の問いに対するアリストテレスの取り組みであるが、ここでロゴスの次元と生成の次元はどのように関わりあうのかという困難な問題への接近を図りたい。アリストテレスはこの問題を最も自然的であるとする生物の複製機構をモデルにして取り組んでいる。生成とロゴスの次元の差は

「動物部分論」において「時間」と「ロゴス」が先後の対比的な基準となると述べられているところに明かである。「時間上質料と生成が先であり、ロゴス上実体すなわち各々の形態が先でなければならない」。(646 a 35-b 2) 図解すれば次のものとなる。

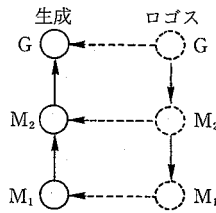


Figure 4

生成上は質料 M₁ から始まり形態 G の獲得へと時間が流れるのに対し、設計上はロゴス上の形態から始まりロゴス上の質料へと逆に向く。ただし現実の生成の場は前者にある以上、ロゴス上の先後関係はあくまで概念上のことであり、ロゴスは本質的に非時間的なものである。またそこでは質料も「ロゴスの質料」であり、これも触手出来ない概念上のものに過ぎず、非空間的なものである。

アリストテレスは複製機構の観察分析を通じて「すでに (*ἤδη*) 或る自然を含んでいる始動因」(646 a 32) の概念に至る。始動因とされる父やその精液は「すでに」各々「現実的に或は可能的に」(cf. 1015 a 18) その自然なる完成態・目的因を実現している。「[始動因である] 人間が [目的因である] 人間を……各々についての基体的質料から生む」(646 a 33-35) のである。「人間が人間を生む」というキャッチフレーズは複製機構のメカニズムを端的に語っている。物理的には熱い空気と水に過ぎない精液が可能的に成人であるということの認識は、それが完成態をロゴス上の設計図として持っていることの発見であったに違いない。この「もともと何であるか (*τὸ τί ἦν εἶναι*)」(642 a 26) ・本質の発見は「驚き」(645 a 19) であり、この働きが「最も自然

なこと」と形容され、この認識に至らなかった人々は「自然について何も言わないも同然」(642 a 16) とさへアリストテレスには思われた。彼は自然科学者に対する自己の立場を彼らの生成の先行性に対する存在のそれとして描いている。

自然の秩序ある一定の産物に関する限り、各々がそのようなものになるから、そのようなものであるのではなく、むしろこのようなものであるから、あのようなものになるのである。なぜなら生成は実体に伴い、実体のためにあるので、実体が生成に伴うのではないから。しかしかつての自然科学者たちはこれと反対に考えていた。(778 b 4-8)

設計概念としてのロゴスが、どのように物理的なものに、分子生物学の描きを借りれば、転写翻訳されるのかという困難な問いに関して、ここでは「靈魂論」ii 4 における植物の成長を司る靈魂の機能を検討することによって、いかにこの設計概念が時空次元で形成実現されるかを見る。

アリストテレスはそこで植物の土的部分が根を下方へ、その火的部分が植物を上方へ動かすという植物の成長のエンペドクレス説を紹介している。彼はそれに対し、何もその運動を妨げないなら植物は引き裂かれるであろうと反論する。植物靈魂は質料を協同原因として植物の成長を支配する。「何故なら火の成長は、燃やされる材料がある限りは無限に進むが、しかし自然により合成されるものすべてについてその大きさと成長の限界と比があるからであり、これらは火ではなく靈魂の働きであり、質料よりもロゴスの働きである」。(416 a 15-18) 栄養靈魂と呼ばれる植物の生命原理はこのように自身の栄養と成長のための設計概念を持ち、質料の働きに限界と比を与える役割を担う。自らの力を質料のうちに発揮することが目的因の機能である。ただし「自然学」ii 9 の分析により判明したことは、このロゴスの働きが純粋に質料のそれとして特定しようということであった。時空上観察可能な力は限界づけられた質料のそれだからであるとも言える。何故ならどれほど目的性の強い生成物であれ、その質料はどれほど複雑なものであれ諸元素、単純物体の合成のみからなるからである。質料は動物有機体では諸部分のことであり、体全体には異質部分が、異質部分には等質部分が、等質部分には元素が質料

である。(715 a 9-11) 究極的には元素の諸力が設計図で決められた比と限界を持つものとして混合され、有機体の一つの質料部分としてゴールを実現すべく必然的に定められた機能を自ら持つ必然性によって実現する。生物事象の元素レベルから異質部分へいたる質料的基礎付けのプロセスは次のように図解されよう。質料的基礎付けは斜線部によって示される。

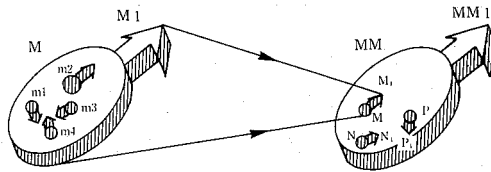


Figure 5

事物 M の M1 という機能はその構成要素である m1, m2, m3, m4 の各々の端的に必然的な力を目的的に合成したものをその質料的基礎付けとして持っている。従って M1 は事物 M の条件付けられた必然運動であり, m1 …… m4 は事物 M がこれらの力だけから構成されているという意味で端的な必然運動の質料的帰結であり, その機能 M1 の質料的基礎付けとなっている。次のレベルでの事物 MM とその機能 MM1 についても同様であり, MM はその質料的側面としては元素の合成からのみなる M, N そして P をその質料的基礎付けとして持っている。それ故に機能 MM1 は元素の端的に必然的な力をその質料的部分として持ち, それらは MM1 の質料的基礎付けとなっている。これがアリストテレスが ii 9 で自然物の生成において「必然的な自然本性」が端的な必然運動をすることによって, 「質料故に」としての説明根拠となると述べていることの意味である。(200 a 6, a 9-10, a 27)

目的因と必然性の関わり方は, 複製機構が「最も自然的なこと」(415 a 26) とも植物は動物よりも「目的性がより少なく分節されている」(199 b 10) と

も言われ、自然が複雑であることに伴い一様ではありえない。ここでは三つの様式を提示する。(a)「形相的自然が質料的自然を支配しない」(770 b 17) ケースがあり、変種が生じる。ぶどうのいぶしのような変種は設計図通りに質料が運動しない結果生じるのである。このことから逆に秩序ある生成とは質料の協力は不可欠であるが、形相がロゴス性を失わずに質料を支配していることであることが解る。形相因と質料因は時に拮抗し、時に協力する自然的力であることがここからも解る。さらに (b) 必然性によって生じた帰結が何かのために存在するケースと (94 b 27-31, 663 b 20 ff, 738 a 33 ff), 我々が問題にしてきた (c) 必然性と目的因双方によって生成するケースがある。(b) の事例としては、大きな動物においては、土質が過剰になるが、過剰物は必然的に上昇するので、それを歯や角にして保身や利益のために利用するが挙げられよう。(663 b 20 ff) 他方 (c) のケースは「多い」とされる。(94 b 31) (a) (b) (c) を図解すれば次のものとなる。

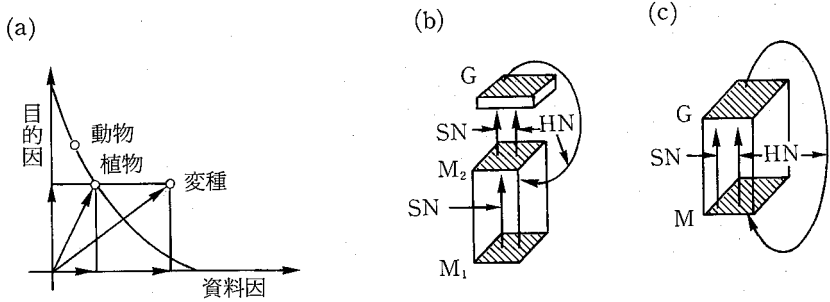


Figure 6

これまでの議論を振り返る時、この(c)のケースの理解が得られる。生物事象は設計図故に生じるのであり、また質料それ自身の持つ必然性故に生じるのである。目的的自然物においては、自然は製作物の設計図を描き、そこでロゴス上質料の必然性が決定される。そしてそれに基づき始動因がその比と限界を自然本性的・物理的に質料因に運び込み、合着した質料はそれ自身の持つ物理法則に比すことのできる必然性に従い成長する。(cf. 735 a 14-15, 19-20, 1014 b 19) それ自身の物理法則に従うとは、実際は設計図に基づき制御されたり増幅されているにしても、設計図なる目的因に一切言及することなく、その質料の元素にまで遡る構成要素の持つ力の分析により定量的に計測できる形で帰結の必然的な生成を語りうるということに対応する出来事のことを言う。このような仕方では生物事象は質料的基礎付けを蒙っている。

9 : 結論

以上見てきたように質料はロゴス上条件付けられるが、時空上それ自身の物理的力によって生成する。そこに矛盾はないのである。というのもそこでロゴス上条件付けられることは必ずしも時空上の運動がそれ自身の力によらないことを意味しないからである。目的因は方向付けられた質料因のロゴスであり続けるが、自然物がシモン的なものであることを思い返すべきである。このロゴス性は定義を試みる時にのみ、別なものとして把握される。従って生物事象の生成は目的因によるものでありまた必然性によるものでもありうるのである。これを目的と必然性の相補性の理論と名付けたい。

しかし、必然性による説明は「事物は常にこのような仕方では生じる」(742 b 19)ということ定量的に明らかにすることができるだけである。この説明は自然物の質料的側面、物理的特徴のみの分析に従事し、これこれの質料から必然的にこれこれの事物・現象が生起したと言うに留まり、「何故そうなのかということの必然性を表現していない」。(742 b 18) 心臓なり目なり有機体の部分が何故これこれの質料、素材でできていて、何故これこれの機能を果たすのかという何故疑問に対する答えがその本質を開示する。そして開示さ

れた本質、もともと何であったかということは決して、物理的、定量的な記述の集積ではありえない。何故なら物理的特性の記述は、環境に対する適合性つまり生存のために有益であるという善、価値を表現しえないからである。目的論的説明はこの問いに対する答えを提示する。

人はここで、物理的レベルで恒常性を説明しうる以上、この何故にの問いは不可欠なものではなく、ロゴスのレベルの導入は不必要であると反論するかもしれない。この論点は生物研究の基本的態度の問題に関わる。例えば植物は一方では恒常的に根は下方に花は光の方に向き、他方時がくれば恒常的に花はしほみ枯れる。この二つの現象に対してそれらが常にこれこれの仕方でするということのつまり恒常性のメカニズムを物理レベルで説明することは可能であろう。しかしその両者つまり生の生成と死の生成に何ら差異を見だし得ないとすれば、それは生命現象が単なる物理現象とは異なるのか否かという生物研究の基本的理解に関わる。アリストテレスは「生きていることは生きていないことよりより良い」(731 b 29-30)という生物研究者として道理ある基本的な立場を表明しているが、これは単に我々人間にとってそう思われるということではなく、自然がそれ自身としてそのようなものであるということへのコミットメントであると言えよう。何故にの問いに答える目的論的説明は恒常的な出来事のなかで、その生命連関における意味づけをその価値賦与という仕方ですべて与えているのである。それが我々にとってののではなく自然に即しての意味づけであるということこそがアリストテレスの見る自然の豊かさを示し、彼の基本的な生命観、自然観を形成させているものである。

かくして本稿を次のように結論できるであろう。自然物が常に質料的基礎付けを持つ以上、あらゆる有機体の構造ないし機能のつまりその存在の十分条件を特徴づける質料的記述は可能であると考えていた。しかしそれは同一事物の目的論的説明とはアスペクトを異にした唯物論的説明というものではありえない。何故ならそれはあくまで事物の物理的説明であって、その本質であるロゴスを開示することはできず、目的論的因果性の役割が担うもの即ちこの自然の意味ある秩序正しさ「美の領域」(645 a 26)を説明しえないか

らである。(cf. 734 b 31-34) こうして彼は自然学者以来の伝統的な唯物論的自然観を止揚し、目的論的自然観を確立したのであった。⁽²⁹⁾

註

(20) アリストテレスが恒常性の基礎にある必然性の問題を ii 9 に先送りしているという事実が、ii 8 における恒常性即目的的という彼の議論は先述 (I 3) のように自然学者に対する ad hominem な議論であり、彼はこの議論から強引に目的論的自然観を打ち立てようとしているのではないことを示している。

(21) ただし ii 9 の文脈は生物の生殖や成長という動物学における変化より広く自然の生成、変化一般の基礎構造における必然性の問題が論じられる。

(22) J. Cooper はこの冒頭の二者択一の問いは「端的にも *καὶ ἀπλῶς* の *καὶ* は Hardie & Gaye のように “as well”, “also” の意味ではなく “actually” や “in fact” という強調として読み、対比は HN と SN の間でなされると解する。というのも HN を双方の選択肢に認めることは「目的論的因果性」にコミットすることになり、どちらもアリストテレスの「論敵である唯物論者の見解を提示していない」からである。(Hypothetical Necessity and natural teleology PIAB, p.265, n.24) ただし彼はこれは「排反的」な択一ではなく、「対比は質料的必然性が機能すると考えられる二つの様式の間にある」(p.266)としている。しかしこの読みに対しては ii 9 は本文上述の文脈にあることを指摘すれば足りる。既に論証した目的論的な自然理解のなかで、自然物の生成に連累する必然性の諸存在様式の確認と判別が ii 9 の主題なのである。尚 Cooper は冒頭の “*ἐξ ἀνάγκης*” を「質料的必然性」(*op. cit.* p.262) と解するが、実際にはそれを特定の含む場合があるにしても、この句は前提と結論の間の論理的必然性の表現として使用されることもあり、必然性の存在様式を問うここでは何であれ二つの事態を想定しその間の必然性(関係)という事柄を示すべく一般的に用いられていると解すべきである。(Charles は、先に見たように (I 4), 1988 年の論文 (cf. 註(1)) で SN を FLHN (前方視条件的必然性) と理解し独自の読みを展開したが、これにコミットしているかどうかは「正直に言って、もはや確かではない」と筆者に口頭で伝えている。(1993 年 8 月) その傍証になるものとして 1992 年の論文 (cf. 註(9)) では「条件的必然性は始動因と目的因双方による原因付けを特徴づけるでもあろう」(*op. cit.* p.120, n.21) という仕方でもはや FLHN には言及せずに、FLHN の代わりに始動因による原因付けと言い替えている。)

(23) Cooper は先述のように胎膜の形成を用いて彼の HN と SN の理解を示すが、そこで質料的「存在」と「その活動」を区別し各々を HN と SN に帰している。(cf. *op. cit.* p.264) しかし「動物部分論」からのこの引用文は質料的活動、生成の経過自体がゴールにより規定

される HN であることを明かにしており、彼のこの区別は否定されよう。

(24) W. Charlton 「II 9 の主題は……質料が必然的であり、形相はそうではなくそして必然性は条件的であるということである」。(Aristotle's *Physics I, II*, 1970, p.127) D. Balme 「アリストテレスの見かけ上矛盾する言明はすべての自然運動は直接的にかあるいは究極的には目的論的であるという見解と和解されうることが以下で論じられる。……従ってすべての生物的特性は……条件的に必然化され端的にはではない」。(Aristotle's *De Partibus Animalium I and De Generatione Animalium I*, 1972, p.76, 80) R. Sorabji 「彼は ii 9 で自然に見いだされる必然性は質料とかかわる必然性であると言う。(200 a 30-2)そして彼はそれによって、200 a 13 で成就されるゴール (telos) はそれ自身必然的帰結ではないかと付け加えながら述べるように、単に条件的必然性を意味している」。(op. cit. p.146) Cooper は Balme の還元主義を批判するが (op. cit. p.260), 「端的必然性により生じる物が生じるのはただ究極的にはそれが条件的に必然化されているが故にのみである」(op. cit. p.267) と解する以上、Balme の主張と大差はない。A. Gotthelf も「(ii 9, 200 a 6-9) 質料として説明的であるということは、その質料の元素的本性と能力からして、もしそれ自身必然ではないゴールが成就さるべきであるならば、必然であるところのものとして説明的である。これは条件的必然性であり、端的なそれではないそして質料的要素がそれら自身によって説明 (ないし必然化さへ) するということを含意しない」(PIAB, p.237) としている。

(25) (a) ἐξ ἰποθέσεως δὴ τὸ ἀναγκαῖον, (b) ἀλλ' οὐχ ὡς τέλος· (c) ἐν γὰρ τῇ ὕλῃ τὸ ἀναγκαῖον, (d) τὸ δ' οὐ ἔνεκα ἐν τῷ λόγῳ. 200 a 13-15 の二文は (c) が (b) の理由を述べ、(d) が (a) の理由を述べる chiasmus である。Gotthelf が「生成するものにおいては説明の出発点であるゴール (the end) は必然的ではない。(200 a 13)」(First Principles in Aristotle's *Parts of Animals*, PIAB, p.198) と述べる時、(b) の ὡς〜(「〜がそうであると同様な仕方です」) を読み落としていると共に、(d) を (b) の理由としている。(Sorabji も同様註(24)参照) Charlton の訳も chiasmus を理解していない。(op. cit. p.43)

(26) D. Ross や Gotthelf は (a) と (b) は同一の「自然過程」であり「一方向 (one-sided, one-directional)」の必然性を示すが、(c) も「一方向」のそれであり、その点で「類比」(Ross) 「平行」(Gotthelf) であると解する。他方、(c) の必然性は根拠から結論に向かうが、(a) (b) はゴールから初期条件へと向かうので「逆」としてしている。(Ross, *Aristotle's Physics* 1936 p.532, Gotthelf, PIAB p.197. 尚 H. Wagner, *Aristoteles Physikvorlesung* 1967, p.485, W. Charlton, p.127, O. Hamlin *Aristote Physique II*, 1972, p.165 等も同様) しかし必然性の根拠付けは常に一方向である以上、Ross 等の読みは何も語らないに等しい。何よりも彼らは (a) (b) の語句の相違を説明し損ねている。D. Charles は理由の提示なし

アリストテレスの目的論的自然観Ⅱ

にはあるが、(c)は「A1 [質料] がしかじかである場合、G [ゴール] は必然的にしかじかである」と「啓示的」な類比関係にあるとしている。(Teleological Causation in the *Physics*, *Aristotle's Physics: A Collection of Essays*, 1991, p.120.)

(27) T. Irwin *Aristotle's First Principles*, 1988, p.112.

(28) Balmeは「Xの質料はそれ自身 X-lessである」と言う。(op. cit. p.78) しかしアリストテレスが『「この質料は何故にこの或るものであるのか」……例えば「何故に煉瓦や石は家であるのか」』(1041 a 26, b 5)と問う時、「Xの質料 M がそれ自身 X であるのはその形相 F の故にである」が求められる答えである。(cf. 1041 b 7)

(29) 本稿は「アリストテレスの目的論的自然観Ⅰ」(北海道大学文学部紀要 42-2 1994)に続く後半部である。本論の作成には北大古典研究会の田中利光、三浦洋、山田友幸、田中享英、田中伸司、ギリシャ哲学研究会の今井知正、樋口博也、永井龍男、荻野弘之、神崎繁等の諸氏、そして古田幹雄、牛田徳子、松永雄二、Allan. Gotthelf、岩田靖夫、中畑正志、岡部勉の諸氏、またとりわけ David Charles 氏との議論から裨益するところが多く記して謝意を表す。またこの研究に稲森財団から助成(平成四年度)を受けていることを記して謝意を表す。

尚前号に以下の誤植があり訂正する。

	誤	正
p.151 l 18	φύσιυ	φύσιυ
p.166 l	円還的	円環的